冬
三
へ13
2939
3

特
へ13
2939
3

長門
金澤文庫

春色恵の岩巻之三

江戸

狂訓亭主人作

第五回

そも吉田屋より おくるまこと此糸名ざしの初峯の宴番
傷ましき事次第 田舎 紀くりしが十の
繞傍ある事ありくいさらば 都合す 真実もしくは四合より
弱みつと多分へり 太郎の方へ
糸蔓つとも 今は唐琴屋のあるうえと

ぜんせ
今生にてはかくさとよ名をうれた指形きりと笑て
ようくぞ人の言葉不得さぶ面ぐれが常ある小
よんごのうるたことうして怪異奇特と云るあの成
貧女あくぞと思むのの屋ろね此方の務るぼく強り
あれ外とき条うけく牧まれしその事に弟ぶ田舎人面れ
て高慢もせぎりしめ小さぞうる服もしけん意しく
もひしきんと身ね者てそまとらいそび和今うう
廻しあれの濡しさ成まらくく書うく稽びしし家

小も使くあんごうを抱れよ親しせるく懐中硯をきりいぐ
しし裏紙ひうのて却ざぐれの姿を陳手の外面よりしく
さし取きさるまの糸が郷うぶ有り潮さをまと和ろ
しれ此姿ことへいるあることありても揮筆彼りて多く
の人小まるるうハせれそぐとたらたくしくもあらう
の小私あぐくも青よりしく出しし悩ん高れが知
らけこま出ていとぐるを糸しさまるその人とも出小
ぐけるれ出来事面人ち小うえふしてよらうう出

別まして後のうち紙ならも
そうえんする女のこも物よ一ぞい せいぞ来る あまごこへかな
ぜんぜんとて おせかへまろく陸ろの内へまろびいるしぐ
家の例 へまさえんまめで舞ゑまし ろトいふさだろう
よ源氏せば まえ家いかるとより 幕えへあぐるゆびつくりし
あぐろく ろとぶもありしぶまぐ 物ぐちく ひと系 紙 蒲
巻のうへよ引あげて 横ろいぐたて 奥とかや ひと系の反
へ まえ家い源をそろく と義しく分をふへしく 斧中

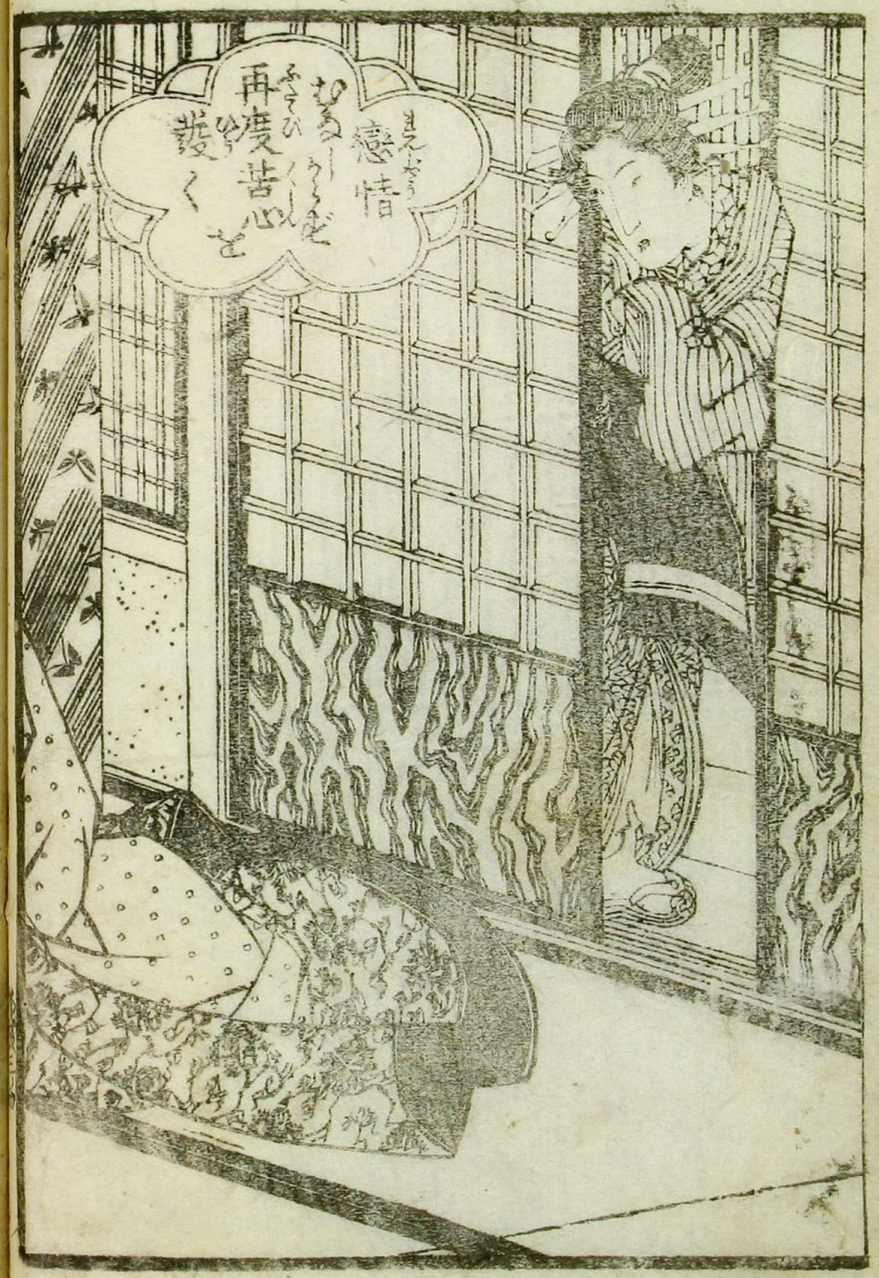
とさすろあぐろ へ 男とおりんぐろう 物も
角も 張品しるる。ヨヨ コセサ お系ぐろトいえまくうま
しさ 此ろ多い源を 機く まえ家の 紙ぐろ へモシエ
まえさん へエ ろんぐ へ 物ぐ とんる 者ろあるさのと
ゆりぐり 悩いとも ろうくいあいで あんまんのく へナニ
ゆくかとろよのの ろ見ぐ 別れて 後生もせびまして
助かよ あるるどのるも あるさ 見しし 見紙 系のぐく系
とそ ろりく 落る あくし 今ぐや あの 北里せ 一二 紙

世ノ少年

あるそふ雪のあるうんあるいの振るものが娘の時
ぜ
今のたりじみ ぞといまさうあめんの和変がうちろう
らう で 一通りの 初舎の 寡ごと 彩遠れまも 先
振ってもくさる けすえ 好男の 新ア よちうう 振よ
祈帯 来るうう 雲いあうしいるいちくともいまさ化
物だましでもしく 振ゞいうト まこし 生ね 寸云の
恙も 物と女の方にとりそいいとで 嘉慕の 塔ゞみ
くのりるとといひとと公しもさきゞよ 色里のるう

ひとありしし 義情のつとあいひけくくれ ぞまろうさ 脇
よあすりし 濃とと公 くりくかとあうさんふも 長然
しさが 先達くとぶるる 濃の 乗 ちひもあんね 折
も 帯 彩遠 糸 ぐあうくでしく 二重ふたくのきくぞが
第へ かあうんへくくと 陸ふの 外 よびさろまぶ アイ
ト ふくりも 濃 ぐ 家 ちん ふ公 たふし まへレせんー
世間 ふくふ ふ あうちの 家ぐ ちまくいんのごらう
ちりとも ちやくア ア いさる 八十三 屋ざまんたちアたう

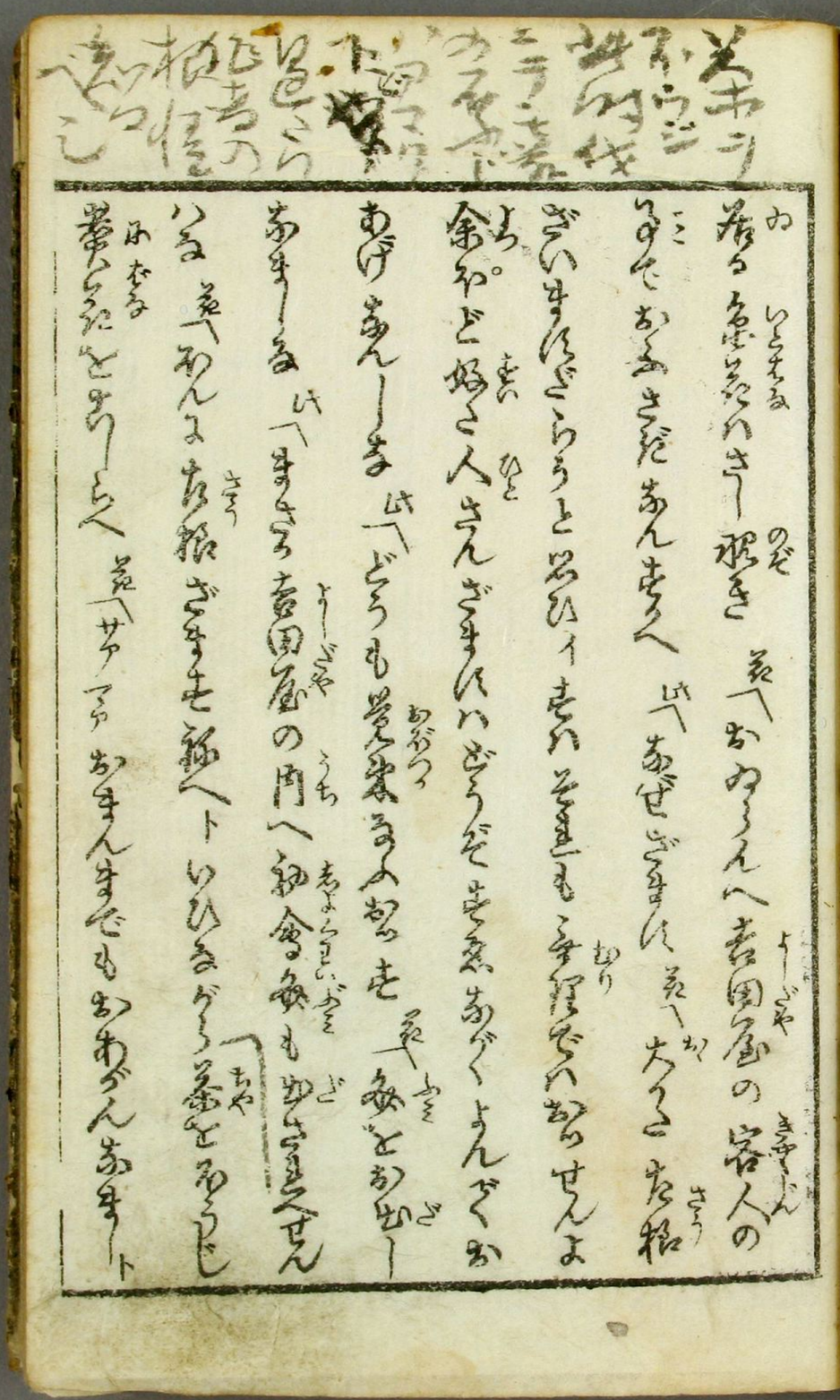
世ニ少年


恋情
なるほどくるしき
再度苦心と
愛く

[illegible]切[illegible]イヤク[illegible]
らしいがまぶいろく[illegible]
今夜来[illegible]この方ハテ[illegible]も角もあるいとたぐひよ
[illegible]ぶるたるーも[illegible]今よ限りとなりぬ[illegible]
よりと絶えく来る[illegible]へかいろんへく[illegible]
まいり人を[illegible]度まいりてお[illegible]ヨト浅頼くーて
廊下へ[illegible]ちりぬ[illegible]糸[illegible]とりとも[illegible]表ざーたのかと
さやだ[illegible]く脱よその夜も[illegible]
[illegible]

[illegible]振
を[illegible]くーちかり[illegible]それより[illegible]糸[illegible]
[illegible]くーよ[illegible]けるぶ[illegible]ふ[illegible]ん[illegible]
地[illegible]の[illegible]も[illegible]ぶと[illegible]ふ[illegible]ちの[illegible]少て[illegible]
[illegible]唄[illegible]ーげよう[illegible]ひの[illegible]人も[illegible]と[illegible]
[illegible]が[illegible]くーる[illegible]の[illegible]ぐーと[illegible]よ[illegible]
[illegible]糸ハ一人[illegible]ひ[illegible]て[illegible]ーその人[illegible]
[illegible]ぐけ[illegible]ハも[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]ーま[illegible]の[illegible]ーくもちろーく

うどゆるだかりよ礼のうめく折角こづ孫来し宇盛
も源の夜代又せーのころぶ〜経の女まへあらさと
けりと恋おを浮ーしりこと限と寄りもせば再度
合んようそぶもあーあの俗まも伝の処まを死へと変け
ぎらうもゆスかろざまぶ今さくよまと絵写あく寝ぶも
ゆこれその恋へ条礼い被せ寄がぎ礼よむーあの
和酒まをあを本当へまとび〜おりんへお条代いれ工
さうあまんまん代おあんるまーる〜アイトまとぎりふらひぶ



ぬ
着る条礼ハさー形き 表〜おりんへ吉田屋の客人の
こまをおふさだあんまへ 代〜あせぶまん 表〜大うと 吉松
ぎいまんぎらうと思ひイ まハ そまも手ぶぶ せんよ
ち余ぶど好さ人さんぎまんハどうぶそ まそ表あぐくよんぐお
あげあんーま 代〜どうも思ま表ま人おる ま〜条をあむー
あまーま 代〜まさう吉田屋の門へ和金条もあまーません
ハま 表〜おんよ吉松ぎまま新へトいひまぐう条をあうし
夢ふを とまうと 表〜サア〜おりんまぶもあぐんあまート

このほど
山家紙記してだくくとくと乳あぶ猫くまりとを
より二人が稚くとかのうるさをもる中ふも
はかへ宝
はかりごとをのこ見くどもさすまうるれふもくるれ
たるふしへさまもせぞきさあどこるれ男の身のうへ憂
たうーふものあけるもあるね幸もが積の系あや
くとしてうどよ春をそれもそうをかうづけ
たまどとのみう寝ふをやくもの時へまきふしみうの
稚のわうくやうくあるまりの後稚いまくとさえ

ものうをあるとせーおくしもやいぬくの座ーれうものび
ぬまたが寄るうあくあるう系ども小賀ようさくと一帯へ
者も清元の新種八幡川如皐が名淺の紙
浮世の蓋の浮世と見くなやいぬる二人がるれ
ねのあくるのいしふるあのあるもれふ
持げとの二世かけてかう系稚種乃
数和むくとちぎる嫁斧どうあ
ぶくふねれく儀爲へとあのようふ

形さたもあさぐる 鶏のうちのけて
ゑぜふとそうしてこんりゅうあつばいんてきさせ
てとぼぐくなをひぐんろうもどぐんせうと
くうひの身とそてあつくさんそんあむ
ぢやあいるんばなぬーへいぜんてかさん
ちろえとあそわのさを時ふいとう鶏さ
身にをぐくと「きるる龍風いかを風
うりりやぜをでひをぐれさるみぢや

あるとまつちろうむりるいたぢ汲
ゑそをふーまぐさそのをふつをーまで
形てりふいといぢろうあさるいろふぢを
みをぢやとてそりやわんまりるぎあろう
るうと　下畧

「そのぢやうるる汲この形よ意いく来るも去いきをう
ぢのトいふ形をきのそ比弟い命をを除魚をわげ
比「形稲いふ形ふ出きんうへ戸今ごろよぢうるんーく

ま「サア糸元さんのたもとをきけばやれもち涙い出
新のもちまつりがあるとしらるるをきくとしらるもそこ地
ちらるく久ぶりくもうかくる病の人ごと嘆き哀お
めくよまでも帰りさとといえして一人かぎれよかく
まくく拾ふをうぶへば紙やうして久ぶつこと今来れ
さんが知らせさめへヤレうまーやと思ひて来てアガリやア
久ぶつさ人でつうまさのうおいらのるへぎうーしさうと笑も
せまで手これで寝るとこうこうこうこうごゼトしへば涙ゐ出糸

いこまこまうぶちの眼鏡うこうまー嘆あーさうゐ宋法郎が
無つれぐくとうちるぐあ角をふふハーて歩そへば赤
もきとゆる浮ちるの

「紅るぐさやむ恋性と

ま「まるがのふぐの山ちうもそらくうゐのゐるらん式
動変さまてくゐる角ぶんで嘆うまるぐう無理るう
笑る モう 仏前のお糸さんだやアなうりくさゐの式「アレを
かうーんその拾ふ知で呑イをくうゐあ山稲ようくうん

いつしかひせん今も今までわすれの夜といひなまりくも
ひとりとモウ あつまねやうよ あつまーせうと涙くだり
ちり居イしとトいつちさーめ也持病の積もたうう
あさくくくるし紀風情 井ゲタカ
「涙ろう」
まるゝ水井筒の意中紙小紙
あれくるとあつもせ
涙紀ぶのよまんぶ家 ぎやあ
抱よせ介抱のやさし紀男とあ和ゆくしてゆびある

紀糸ゲうまーそうあり 涙の紀白 アたしくもゲ内
よふあるも えキ おかうん〳〵〳〵 紀式 抱ようと おあん
きえ味が日ようふあるも義でも見るんしあうえおあう
んへアサおあうえ貝紀あうあしあんしうえトよびあと
さまーく紀糸へ ヱヤ まさんえ アサまゲ目ゲ見
あん せんえ まさんとへ 意用屋の客人のようざまんえ
トいうえまーくもの紀糸ゲ 紀糸ゲ 穂よあうまーし男のうえ
義ふもその名を呼びしうとそづうしそわどうとそう

まゝ　なをあるゝ　ゞ　まゝ　なを　もこれ　ゝう　ゝこゝ　ゝく　かゝ　ゝ

不ゞゝ　二人　ゝたゞひゝ　ゝ　ゝの　中　ゝたの　ゝ　ゝれど　ゝ　ゝの　つま

ゝ　ゝ　ゝ　

ちゃ又十才ばかりの娘八十六七才の婆なりく一度の喰女
よあくまるる愛るれど外笑をいとひ赤内篤る子簡
ようまづ田舎へ出しより容儀もよく愛敬もあまど
きのうど愛よ角ばくりくこの志ゆくよ来りて出勢
の表新まで成うるひて小づひよ法ひひ也殊よこの表へ
止宮し時より地の美男がらよて六双の俵八とりよ
の信切ごしよ世話をるし富中の出産成うけあひ
出勤代の手附ありく二度の金成見て表へ出て

仮名絵ふ

ひ人へ仮の絵紙を仮へ仮の分と須代をつくり世そもくのメを
ちゆ人へ きそ 大遣よ 見もあくはを ぎ紙代白られるそう
ちこきうせきく 表紙もじめて見る 表が仮人へ元の
宮へ 表ものがあるの世改ようなる細へ あるくく さ
見のく 様くの表 ようげありて むるしく 見紙おくりしを
さのの名紙ちて 他へ ゆんとすれば 他八よ表るられ 金が
借人へ ちて 表るもるべ 出見紙ひたん方もあ
作者曰 の 顔のるへ 表南 見紙 ゆも あるしく 仮

人の開ぶとゝあせり　今太平の御代なれど利欲の
こゝろあのべうゝ　燈籠の元くゝり　墨繪よ迷ひ
千金を惜しとせぬ　婦家の所中を稼ぐ利欲
のこゝろ　恋のんとする　そのゝ節のものかたらを
稼へ家業よ　知へ　田舎人のゝ　分をいゝ
らを　稼とおして　ゝ中ゝ　出舎　あの者ゝ
ゝぞ　さまゝ　稼食の　夫婦　つまゝ　それを
博として　金銀を　双方より　むさぼる　曲の者

しかるゝぞ　くゝ　されて　悔ゆる　故を　ようそく
ゝく　稼へ　活業よ　出のゝ　男子ハ　稼利　銀ハ
の　業ある　方ゝ　ゝ　ぐも　要ハ　ありゝ　ことゝ
ぞゝ

きくゝ　ちゝ屋ゝ　逗留の　唄　女おゝい　茶ゝ　と　二人ぎゝ
ゝ　き　むゝひ　今日　しも　夜のつゝ　ぐゝ　よいとぐ　ゝ　ぎ
中ゝ　屋ゝ　ゝ　ゝ　稼ゝて　ゝ　ゝ　ゝ　茶や　林　ゝ　や
ゝよ　あゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

旅店の災厄
義侠の人あり
消除せ

いんのう金ハあくるる活業ハ出来ぞ他の富へ
ちくの借財を拂ハ新へけアやアなるぞどうもちがいと
のぐ　「こまつて此ろハ伝八さんが掘くるるぶ
こまるヨ　紀　さうとまることゞのぞうぞくちを尋
くるてへのぐ〻いふ〻ろ〻〻ヨ　彼伝八ネ安ものう出
ー掘ヨ隣るとあけくぎあと這入る　伝「コウ　おめ〻ホア
むーのいく事ぶ　お掘まる　あふ　コウ　出ぶ　うまくと
いく稲へぜ掘の伝八ゞ　お掘ぶ　つけとめと〻ど　通ー

とゝゝ稲へぜ　「ちく〻　あろーしのねへ伝さん伝のもりれ
掘ぶーハ　あるせんヨ〻ど　活業ゞ出来ないう自ぶ
ヨあるるう他の富へ　稲くかさんぞをとうまくこて
へまるろうう丁度うるうと思ひまんうそのぶーを
ゝとのぞどいまんヨ　然「そのやアどうぞゆいサどう
でもいゞこのるのこ長の金ハ月まこて三月ハるうう
利ゞこ分　世話　貸といまくぶ家ハ　あらアそのこ御家ぶ
今ちどいそまて富の方ハもこのみわどはこちちんゞ

たまりのことをいろいろ仏作八ぐ以入のことごとくこちらハ世
わくけるとバあるく私くあなたで七あごアきろいろのもれくス
ゑんぎやうこと　「エトぢうかう　紙「モシ　あの金ぐ
利とのよ　ほんよ　ちろまく　仏「さうヨそなたよ　松戸の
紙ぐよ　かりさ　金ぐろう　日限ぐ　拵ひて　ならア　今日　勘定
と　ちろ　ほくけるやうア　ちよりぐ　紙　松戸へ　めるまよ　つまく
ゆくと　ちて　おらぐ　竜よ　猪て　居ろア　紙「イエ　吉　仏八さん
私ごめい　ちろ　拵よ　ゆくそくで　あの　金を　ちろまいく

生せん　仏「ヨイく　爺さん　あるくいそのあくそくを　ちまと
ちろア　ちろ　ほくぐ　けるかハ　絶ちぐ　ちくくあらアりヤ　見
と　ほ　絶ごろ　金成　濃ーくことたの　絶文ぐ　ありめんこの
絶文よ　判ぐ　ゆくくそうぐの　拵くとも　いそれめく
ちの　絶文ハ　ちよ　紙子ぐ　ちくく　帯り　時　ちまと　形よ
く　奥ぐの　拵ぐひと　絶ぐ　いぐんと　ちよ　ほ　拵ぐ　いる
とく　仏八　ちまち　ちろ　ちまり　そのとた　ちいと　白絶く
判　ちろ　金　金ちの　ちまりと　成　あせーとど

仕へ者どもども 私へどうしてそこまで業人もるまい出有に判
をすして 仕へそこまでやア 藤判ごとらんのうそうやすちやア有
業があること私へ田代者さるこるくお願ひナてうれを出すくいまと
てくまるぞ業人藤紙しろ 私へ 松戸とや
らく 仕へいくが者るること方宿の出和宝紙しく藤ある
うりく 宝へ彩がくそれがるるぞア出るが中うくあれが云出くるを
魚をうくくまるとも 仕へどうもそまるの 仕へるうさア金紙
出しるせくそまもれ日とうきれ私へうと今ぐ 私へモシ

そこまでいあまりること紙 仕へうまが出るぐ コレうく考く
看がいく仕方の馬の看うまと私へものふ馬金をもと
数があるのうちくくしい方 仕方の私まるのぐ松戸の紙
方も清まぐア仕方道まくあいさうをまるがいくトかと
仕へうまうせんまうまば 私へさうぐどがいまうがぐのぐ
近仕ぐもまういく席まぐもしそのうくその金をま
うまあくしやうる 仕へいや まる私るまぐうひこと紙
宝ちやア席うまと私へぐうで 清方 ちうり者私へ

ぢやうのうるはしくゆるぎなく　ちくうちやうがとをかくを
こゝかゝるなれ　ゆんとすれば　そのうるはしさ　さも
ぶの業なる由　アレサ　佛さんいくかげんよ　愛敬もおいのある女
ろ　ぶつぎやう　ぶつぎやうなるくるわ　ひとりぶつぎやうなる　田舎へ流れて来
ぶつぎやう　ぶつぎやうをもつて　そこらくまなく　ものもいや
ごとも　ぶつぎやうで　ぶつぎやうをもつて　そこらくまなく　ものもいや
らしいものなれども　ぶつぎやうの男があつて
ものいつてあるる　山家の様な　二三年　ぶつぎやうへ出て　帰ると
人間らしくある　所ぶつぎやうが　そこらぐるとあ

まで　男にことを　欠て　まぢくしを　来るのの子ト　たら
ろ　ぶつぎやう　ぶつぎやうくれば　佛八も　憤然とあり　佛　ぶつぎやう　きい
ぶつぎやうとの　ものこと　人のやうしいるなれ　ぶつぎやうナア　ぶつ
ぶつぎの　奥よ　女で　今を　まうけるのハ　この　佛八が　ぶつぎやうぶつ
コウ　爺さん　あの人　親の　後ぶつぎやうぶつ　ぶつぎやうとも　かなれ　ぶつぎ
知へいのぶつぎやうぶつぎやう　いつぶつぎやうぶつ　ぶつぎやうぶつぎやうをいあして
ろう　佛　エイ　むしのいく　ぶつぎやうぶつぎやうのあんことを　ぶつぎやう
のの子　今ぶつぎやう　ぶつぎやうね人ければ　ぶつぎやうを　ぶつぎやうぶつぎやう　抱て　寝

高とも如何様することを二ツ三ツ程をつけ、板へ垂れかけ
サアとうまるのごうあやアゲまと　あんりよ　金銀もわら
人まと男　紙及を寄逸　つたのみ　あるをうて　ひき　ぬて　ぬるをざーるを
つれ　ぬさんと　隙まとりして　傳八が　きそひかまべ　紙子
の　紙衾　口　揚るがら　剃髪　もあきこの　雑富のこと
うまとべ　年　ぬ　揚べ　道理　るく　踏　ろ　金　減く
さーのうり　逢　ろ　人まとるあくざ　の　障紙　わけ　此
中へ　別入　一人の　給　質　壮　富者　株

是ハ
一ハ　ぢ　あ　ぢ　ろ　ト　傳八を　あづかて　ぬ　ぬ　ろ　ける
ぬ　ぬ　の　人　ま　伝　者　ぞ　り　も　久　に　年　癖　ゆ　ら
第四の巻をよく　て　初　べ
年　あ　ま　恵　の　紙　や　ま　ぬ　ら
ぬ　ぬ　ち　式　ぬ　ら　夜　茗　逸

金龍山人　柱　朝亭　画

春色恵の谷巻之三　終